

■みずみずしいタッチとセンスでくりひろげるソロ・ピアノ!

ジャズ・ピアノは今ではトリオの演奏が定番のようにになっているが、もともとピアノという楽器は誰の助けを借りなくとも独立した完璧な楽器であり、クラシックではピアノ・ソナタをはじめ、ソロ・ピアノの演奏は当たり前のものになっている。

ばくも古いジャズ、ニューオリンズ・ジャズ、ディキシシー、スイングから聴きはじめたから、ピアノ・トリオという形式にはあまりこだわらないタチである。ピアノの天才と呼ばれたアート・テイタムはソロとトリオの演奏を行っていたし、バップ・ピアノの立役者バド・パウエルは確かにトリオによる演奏もみごとだが、詩的で、しかも緊張感がいっぱいソロ・プレイが大好きだった。

思い返してみると、ピアノ・トリオという形がほんとうに定着して
 人気が確立したのはオスカー・ピーターソン・トリオの頃からはな
 いかという気がする。それもギターをドラムに変えて作ったトリオに
 なってからだ。

ジャズの世界でのピアノという楽器はちょっとふしぎな存在で、ジャズが生まれたばかりの頃、ニューオリンズではブラス・バンドによるジャズが盛んで、街頭をパレードしながら演奏することが多かったの、バンドにピアノがなかったこともあり、ピアノは他の管楽器とは別の道を歩んできたともいえるのではなからうか。

初期のジャズ・ピアノといえば、まず思い出すのが“俺がジャズを作った”と高言してはばからなかったジェリー・ロール・モートンのことだ。彼が20年代から吹き込んできたピアノ演奏や弾き語りは、今聴いても「う～ん凄じ」と唸られるが、彼がラグタイムを、そしてブルースをジャズに変えたことは確かだ。ぼくは長年こういった古いピアニストたちを沢山聴いてきたので、ソロだ、トリオだといった編成にこだわる気持ちはまったくない。

と、ここまで書いてきて、なんだか、ソロ・ピアノ好きの屁理屈を述べてきたようで気がひけるが、ぼくは沢山ジャズ・ピアノを聴いてきた結果、「ジャズ・ピアニストの実力はソロ演奏を聴けばわかる」というひとつの結論に達したことも確かなのだ。

ぼくはこのエディ・ヒギンズのソロ・ピアノによる「あなたは恋を知らない」を3回も聴き返しているが、そのたびに彼のみずみずしいプレイに驚かされている。彼が何歳などということは忘れたほうがいいし、実際に忘れてしまう。すみずみまで繊細な神経が行き届いていて、どの曲にも生き生きとした生命が吹き込まれていて、一曲一曲が聴く者に小さなストーリーを語りかけてくる。いってみれば、このアルバムは12のショート・ストーリーからなる短篇集のようでもあり、次の曲が現れるのをわくわくしながら待つ気分にさせてくれるのだ。

ソロ・ピアノ集にもときどき落胆させられることがある。やたら音
を多用していて、いろいろさせられることもあるし、自分のテクニッ
クをやたらひけらかしたり、そばにベースやドラムスがないのが不
安なのか、空間をすべて埋めつくして、まったく余裕がない演奏
もあったりして、ソロ・ピアノはすべて自分一人で責任を持たなけ
ばならないから、大変な作業なのだ。

その点、エディ・ヒギンズの演奏にはさすがだと感心させられた。トリオの時と同じようにまったく自分のペースを崩しておらず、不必要な音もなければ、足りない音もない。ここで演奏されている曲はみんなよく知られたスタンダードやポピュラー・ソングであり、原曲の美しさや魅力を生かしながら、そこに自分のスタイルや個性を織り込んでいくのだが、あくまで原曲自身をもつ姿を浮かび上がらせる手法をとっている。それがとても好ましい。

You Don't Know What Love Is

あなたは恋を知らない

Eddie Higgins Solo Piano

エディ・ヒギンズ・ソロ・ピアノ

1. 星に願いを
When You Wish Upon A Star (L. Harline) (3:49)
2. マイ・ファニー・ヴァレンタイン
My Funny Valentine (R. Rodgers) (5:34)
3. デイトウ・アヘッド
Detour Ahead (H. Ellis, Carter, J. Fringol) (5:44)
4. ビューティフルラブ
Beautiful Love (Y. Young) (3:21)
5. ダンス・オンリー・ウイズ・ミー
Dance Only With Me (C. Camden, J. Green, J. Styne) (3:55)
6. ダニー・ボーイ
Danny Boy (Trad.) (4:59)
7. オールジーズ・アッド・ヘブン・トウ
All This And Heaven Too (Van Heusen) (4:21)
8. イエロー・デイズ
Yellow Days (A. Alvaro Carrillo) (4:34)
9. スカイラーク
Skylark (H. Camichel) (3:56)
10. アゲイン
Again (L. Newman) (4:04)
11. あなただけを恋を知らない
You Don't Know What Love Is (D. Rys, G. De Paul) (5:22)
12. 虹の彼方に
Over The Rainbow (H. Arlen) (4:15)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins 《piano》

録音：2003年7月4日 BSTスタジオ、東京

ピアノ:ベーゼルドルファー・インペリアル

© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara .
Recorded at BST Studio in Tokyo on July 4 , 2003.
Engineered and Mixed by Shuji Kitamura.
Mastered by Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
(Venus 24bit Hyper Magnum Sound)
Cover Photo : FrancoVogt / Corbis / Corbis Japan.
Designed by Taz.

このエディの演奏を聴きながら、ふと30年近く前にニューヨークで聴いたピアニスト、エリス・ラーキンスのプレイを思い出した。その頃、カーネギー・ホールのそばにちょっと洒落たレストランがあって、コンサートを聴く前に食事のために入ると、レストランの奥のほうで、エリス・ラーキンスが静かにソロでピアノを弾いていた。彼もスタンダードばかりを集めて演奏していたが、よく見ると口を少し動かしながら弾いているのである。なんと、彼はほとんど声には出さないが、曲の歌詞をつぶやきながら弾いているのである。なにかピアノによるバラード演奏の極意をみる思いがしたものだった。

このエリス・ラーキンスのことを思い出したので、ぼくはこのエディ・ヒギンズのアルバムを聴くにあたって、ちょっとぼく流の面白いやり方をするにしてみた。まず、この12曲の中から、特にぼくが好きな「星に願いを」「ダニー・ボーイ」「虹の彼方に」「アゲイン」を選び出し、これらの曲の歌詞を見つけてきて、歌詞を見ながら聴くことにしたのである。歌詞はヴォーカル・レコードや「ジャズ詩大全」といった本の中からすぐ見つかった。そして歌詞を広げ、歌詞を追いながら聴くかどうか。まるで歌詞を心の中で歌いながら弾いているとしか思えないほど、歌詞の流れと意味に沿った弾き方をしているのにびっくりした。エディはひょっとしたら、これらスタンダード・ナンバーの歌詞をみんな知っていて弾いているのではなからうかと思えてきたのである。そして歌詞を見ながらエディのプレイを聴くと、一曲一曲に物語があり、このアルバムが詩的で粋な短篇集であることを実感する。

エディはどの曲も、ちょっとイントロやヴァースを弾いたあと、コーラスに入るが、「星に願いを」なら

When you wish upon a star

Makes no difference who you are

Anything your heart desires will come to you

といった歌詞を見ながら、あるいは自分でそっと歌いながら聴くことをすすめたい。

そうすると、エディがいかに曲を深く理解して、その曲にふさわし

いブレイをしているかを実感することができる。そして、彼のピアノが心底歌っているのに気がつくにちがいない。「星に願いを」はディズニー映画「ピノキオ」の主題歌だが、特に女性に好まれる曲のようで、女性歌手や女性プレイヤーがよく取り上げ、秋吉敏子も好んで演奏している。

「ダニー・ボーイ」はアイルランド民謡で、ジャズでもよく演奏されるが、なんといってもアイルランド系歌手ビング・クロスビーが歌ったものが名唱だ。ぜひビングの歌を聴いたあとか、歌詞を探してきて、それを見ながら聴くと、エディがこの曲のもつ哀感をいかに巧みに表現しているかに驚かされるだろう。こんな心にしみるブレイは滅多に聴けるものではない。

「虹の彼方に」もいい曲だ。歌ってもいいし、演奏でも栄える曲だ。やはり映画「オズの魔法使い」で歌ってヒットさせたジュディ・ガーランドの歌が印象的だが、ちょっとヴァースを加えて弾くエディのしみじみとした、「虹の彼方に」の幸せを予感させるプレイはいつまでも心に残る。やはり

Somewhere over the rainbow

way up high

There's a land that I heard of

once in a lullaby

といった歌詞を見ながら聴きたいものだ。

「アゲイン」は1948年に作詞、作曲され、50年代の初めにかけてドリ
ス・ダイの歌でヒットしたポップ・チューンだが、ぼくは当時SPレコ
ードを買ってきてくり返し聴いたし、今でもなぜか好きな歌で、楽器
演奏のものもあれば聴きたく思う。このエディの原曲の味わいをこわ
さずに弾いた演奏に出合って、とても幸せな気分となり、50年前の青
春時代を思い出させてくれた。

こうやって一曲、一曲触れていると紙数がつきるので、この辺にするが、エディ・ヒギンズといえば、シカゴを思い出す。シカゴで長くプレイしていたので、シカゴのヴィージェイのアルバムで一度注目されながら忘れかけられたのを再び陽の当たる場所に引っ張り出し、彼の魅力をフルに生かしたアルバムをつぎつぎに出したのはヴィーナス・レコードであり、この会社の功績は計り知れないものがある。

しかし、今でもエディのプレイを聴くと、少々シカゴを思い出す。シカゴにはアーゴというレーベルがあり、ラムゼイ・ルイスなどを売り出したが、アーゴのアルバムを探すと、サイドメンでエディが入っていたりすることもある。ベース・トランペット奏者サイ・タフのアルバムにはエディが参加している。

シカゴも大都市で、5センチ以上もある厚いピザも名物だし、中華街はニューヨークのそれよりもっと安い。ブルースも盛んだし、20年代以降ジャズも栄えた。今でもヴォン・フリーマンはシカゴのボス・テナーとして有名だ。出版社が多く、今では楽器市場としてにぎわっているが、それでもジャズではニューヨークと比較すると、ローカルな感は否めない。エディ・ヒギンズほどの名手が長く埋もれて見えたのも、シカゴや、それからしばらくフロリダにいたからだろう。

その彼の才能を再発見して日本で花を咲かせてくれたのは喜ばしい限りだ。アメリカのレコード会社にまかせていたら、こんな素敵なソロ・ピアノ・アルバムに出合うこともなかったのだ。なにかエディのきめ細かいピアノ・タッチは日本人の肌にとったり合うと感じるのはばくだけだろうか。